

レスピナス著 パリの歴史：パリの職種と同業者組合

非常勤講師（西洋服装史）辻 ますみ

中世のヨーロッパ各地には都市が栄えたが、その都市を構成した主たる住民は、産物を売買する商人と手に技術を持つ職人たちだった。彼らは同業者組合（ギルド）を組織して利益を守り、徒弟制を設けて技能の水準を保ち、質実ながらも誇り高い生活をおくる敬虔な人々であった。彼らの活躍ぶりは当時の細密画や木版画などに数多く描写されており、その素朴な表現から伝わる中世人の生活の様態は我々にも親しいものとなっている。

古い都パリで活躍したさまざまな商人や職人たちの歴史を具体的に教えてくれるのが、レスピナス（René de Lespinasse）著の『パリの歴史：パリの職種と同業者組合』（Histoire générale de Paris; Les métiers et corporations de la ville de Paris, 3vols, Paris, 1897）[602・35-L-1～3]である。著者は本書によってパリの商人・職人の種類と彼らのギルドの歴史を探り、それによってパリの住民の歴史を明らかにしようとする。120種のギルド（フランスでは一般にコミュニテ Communauté とする。コルポラシオンは18世紀に再編成された団体に対して使われる。）に関してその成立時期、ギルド規約の内容とその改正令、他ギルドとの訴訟などの文書を年代順に提示し、ギルドの変遷を捉えようとする。内容からいって経済史や労働史の資料として貴重なものであり、事実その方面の専門書に引用されることが極めて多い。条令文書は慣れないうちは難解だが、完全な文書が集録されしかも解説や註が行き届いているので、信頼できる資料として活用される。私が本書に出合ったのは衣装関係の職人の歴史を調べていた時である。仕立屋や下着商をはじめ衣類と装飾関係の職人の種類や製作範囲、ギルドの合併や独立などはいずれも興味深いもので、服装

史の裏面を知るうえで大へん参考になった。

パリにおいてギルドの諸習慣がはじめて集約されたのは聖王ルイの時代であり、パリの奉行工ティエンヌ・ボワロー（Etienne Boileau）が1270年に「ギルド職人の書」（Le livre des métiers, レスピナスはこれを集録した解説書も刊行（1879年）している。）を完成し、それまでに設立されたギルドとその規約が公文書化された。レスピナスはこの書を出発点として以後1791年の革命政府によるギルドの完全廃止令に至るまでの約500年間について、各ギルドの主要な条令を集録している。

第1巻は序文に続いてパリのギルド全般に関する条令について1322年から1791年までが列挙され、後半は食料品関係の25団体（パン屋、肉屋、魚屋、果実商、菓子商、食料品商、ワイン商、ビール商、菓屋など）が取り上げられている。第2巻は金銀細工師、宝石商、金箔師、七宝工、扇子屋などの装飾品製造と小間物商など13団体、金属加工関係として鎧製造、刃物工、ブリキ工、鍛冶屋、鋳物屋、ピン製造、釘屋など17団体、建築関係として、石工、屋根屋、指物師、車大工、家具製造、ガラス屋、舗装工など14団体が取り上げられる。第3巻は織物や服地や衣服に関する19団体（絹リボン商、羅紗商、製麻工、梳毛工、縮絨工、剪毛工、染色工、下着商、仕立屋、裁縫屋、帽子屋、靴下屋、羽根屋など）、さらに皮革を扱う革なめし工、製靴工、古靴屋、毛皮商、袋物製造、革スボン屋、古着商など10団体、最後にその他として馬具馬車商、樽屋、桶屋、ブラシ屋、提灯屋、時計屋、両替商、吟遊詩人、ダンス教師、手袋屋、香水屋、床屋、かつら屋、製紙工、印刷屋など22団体が集録されている。言うまでもなくこれらのギルドには規模においても勢力においても大小があり、な

かには合併、吸収の歴史をたどったギルドもある。

一般的なギルド規約の中味は、営業の時間、特定の祝祭日、徒弟の数と年季、扱う製品または商品、審査官の訪問と謝礼、親方になるための昇級作品と納入金、偉反した場合の罰金などで構成される。序文にあるように、ギルドの性格は500年の間に変化しており、15世紀まではパリ奉行の監督のもとにギルド本来の性格を保持していたが、16、17世紀に王権が確立していく段階で、国庫の税収の対象となるとイニシアチブは失われて諸納入金が増額され、やがて18世紀に向って崩壊への道をたどることになる。

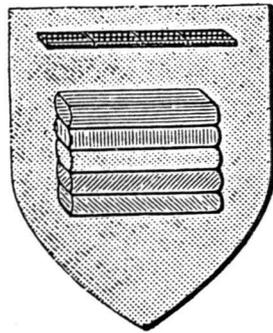
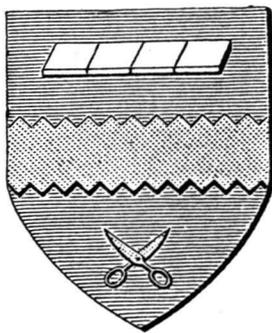
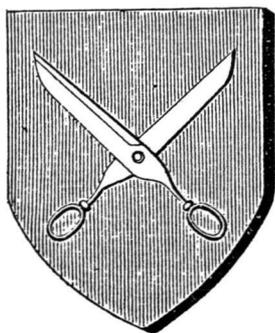
私が目を通したのは衣装関係の一部のギルド史であるが、経済史としてではなく、服装史との関わりあいの上から職人の動きを読みとっていくことを試みた。ギルド間の対立や紛争や合併の過程をたどっていくと、職人の縄張り意識や活動の制約が分り、また衣装の流行変化をふまえてみると条令の裏にあった実状が一層はつきりしてくる。たとえば仕立屋(tailleur)を取り上げてみると、彼らは衣服仕立の分野では常に特権を持ったが、本来は文字通り布地を裁断する人であってその勢力下に各種の縫製工をかかえていた。この中から短い胸着が流行する14世紀に、ブルボン仕立工とショース仕立工が独立してギルドを持つが、

17世紀には前者は仕立屋に、後者は羅紗商に吸収され、再び仕立の特権は仕立屋に集中する。逆に17世紀末期に仕立屋の傘下から独立したのが女性の裁縫屋(couturière)であり、その背景には婦人服の種類が増え需要も増大してきた状況がうかがえる。一方、生地や糸や付属品など仕立材料を商う特権を持った富裕商人の小間物商(mercier)や、修善も請負った古着屋や、布のくるみボタンを認めないボタン屋との間に、越権行為が絶えず起り、仕事を制約するギルド制の欠陥や、ものを作る職人とそれを売る商人との格差がしだいに浮き彫りにされてくる。

古めかしいギルドの条令集ではあるが、その中から職人や商人たちの労働のようすや生きがい紛争を浮び上らせ、彼らの生活ひいてはパリ市民の確かな生活力を想像させてくれる面白さを、本書を通して経験することができた。さらに深く読み進めていけば新たな発見があるだろうと思われる。

長く重い職人史はまたパリ市民の不屈の戦いの歴史でもあったが、その中で育まれてきた職人技賛美の精神は、時代が変り社会が変っても受け継がれ、現在もお世界的評価を得ているファッションや諸工芸品の中に生きていることを、いまさらながら再認識している。

ギルドマーク



- ①仕立屋(tailleur d'habit) 銀のはさみ。②下着商(lingère) オール尺とはさみ。③羅紗商(Drapier-tisserands de laine) 反物とオール尺。
女性の裁縫屋クチュリエールも同じ図柄だがバックの色が異なる。